

# 第1回「日本語大賞」

テーマ 「人と人をつなぐ日本語」

中学生の部 優秀賞 受賞作品

## 「言葉がつかない人と人」

大阪府

大阪教育大学附属池田中学校 1年

松岡 里咲

まだ初夏、それも朝というのに、ほんの五分も歩いただけで背中汗でじつとりと制服がくっつく。駅まではあと十分かかる。昨夜も、勉強するつもりで机にむかっただのに居眠りをしてしまった。夜中に目を覚まして、やっとの思いで入浴し布団までたどり着いてから、もう一度眠った。そのため合計の睡眠時間はそれなりにあつたはずであるが、どうも居眠りしてしまった次の朝は眠いし疲れが残る。親にも叱られるし自分でもやめようと思っているのだが、最近ちよつとくせになつてしまつている。暑さもあり、頭がぼうつとする。それでも学校まで電車とモノレールを使って徒歩も入れると一時間はかかるので、のん気にはしてられない。

「今日もがんばっていきましよう」

と自分に発破をかけたその時、前の坂道を小さな歩幅で地面を踏みしめるようにしてゆつくりと歩く少し曲がった背中が見えた。

「おばあちゃん。どうしたの？」

大きな声を出したとたんに気付いた。明らかに人違いだ。私の祖母はるか遠くの埼玉県に住んでいるので、この道を歩いている訳がない。私はどうかしていた。でももう取り返しがつかない。その老婦人は足を止めてから、ゆつくりと振り返つて私の顔を見上げた。

「おやまあ、おはようさん。これから学校？ 朝早く大変ねえ」

私は見ず知らずの人を「おばあちゃん」と気軽に呼んでしまったことをひどく後悔した。いくら年をとつていても「おばあちゃん」と他人から呼ばれて良い気持ちでいられる人がどれだけいるのかと思うと、返事があつてもすぐには顔を上げられなかった。しかも、自分の祖母ならともかくとして、こちらから話しかけたにもかかわらず、肝心の用件が無かつた。正直に訳を話して謝るか、そのままニッコリと笑顔で会釈でもして何事も無かつたふうにして立ち去るしかないかと考えていたら、下向きの視線の先にその婦人が手にしているいくつかの荷物が飛び込んできた。

「お荷物、重そうなので持ちましようか？」

「あら、大丈夫よ」

「ええ、でも、…。私、持ちます」

何だか無理やり持たせてもらった感じ。こんな「持ち逃げ犯罪」、世の中あるよなあと内心、我ながら苦笑するしかなかった。

「中学生？　うちの孫もこんな頃があったけれど、今はすっかり大きくなってしまっただけ。でもみんな元氣やからそれが何より。私は年をとる一方やけどね」

話し好きの人と見えて、話題はこと欠かない。幸い、私を心底信じてくれているようでよく笑う。私にとってはそれがとてもありがたかった。ただ一つ難しかったのは、歩く速さを合わせることに。普通に歩くとすぐに前を行ってしまう。それも私の祖母ととてもよく似ている。

駅まで着いた。

「それでは失礼します」

こんな時、どんな言葉をかけたら良いのか、よく分からないので、私はそう言って、ペこりとおじぎをした。

「ありがとうね。おねえちゃん」

老婦人は、荷物を受け取ると、曲がった背筋をゆっくりと伸ばすようにして、また私を見上げた。ちょうど電車の発車のベルが鳴ったので、私は別れのあいさつをして電車に飛び乗った。

電車の中はいつも通り混んでいた。ぎりぎり最後の集団として乗車したので、扉のガラスが間近に迫る。自分の顔がそのガラスに映っていた。

（おねえちゃん？）心の中で復唱してみた。何だか不思議。「おばあちゃん」と言ってしまったのが発端でこんなことになって、最後はその「おばあちゃん」から「おねえちゃん」と言われるとは。血がつながっているわけではないのに、すごく身近になる言葉同士のやりとり。それにしてもやっぱり知らない人を「おばあちゃん」と呼ぶのは勇気がある。いくらぼうっとしていても、これからはよく人を見てから声をかけねば。

ドアが開いて、たくさんの人たちと一緒に私も電車から降りた。急げ。いつもより遅い電車に乗ってしまったから、あとは思いっきり走るしかない。さらに制服が背中にぴったりとくっついた。